

パーキンソン患者の発話の調整に有用な外部キューの検討

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
関 道子

本研究では、パーキンソン病患者の発話の調整に有用な外部キューについて検討した。声量低下がある4例のパーキンソン病患者に対して、聴覚的なキューである遅延聴覚フィードバック (Delayed Auditory Feedback; DAF) 法と視覚的なキューである音圧レベルのモニター提示法の2つの方法を用いて発話の調整を試み、それぞれのキューの効果を比較した。評価は、機器を用いた客観的評価と、外部キュー使用時の発話の状態の自覚的評価を行った。結果、「声の強さ」は症例によって有用なキューが異なったが、「声の高さ」はいずれのキューでも効果が示される例があった。「ピッチレンジ」はいずれのキューでも明らかな効果がみられなかった。「発話速度」はDAF介入でのみ効果がみられた。自覚的評価では、外部キュー介入時に発話運動や声の高さに対して注意が喚起された例があり、発話の調整に影響している可能性があった。また、DAF法、視覚モニター提示法ともに、介入後のキューなし条件にも改善効果が持続する例があった。本研究の結果から、発話の調整に有用な外部キューは、対象者によって、或いは測定する指標によって異なることが示唆された。また、外部キュー介入時の発話の運動パターンをキューのない条件において再生し、外部キューがない状態でも発話を調整できる可能性があると考えられた。